

水野源六家と加賀金工（2）

黒川 威人

はじめに

前報では加賀金工（白銀師）の宗家たる水野源六家の初代から当代に至る十一代の大まかな流れを紹介したが、本報からはこの水野家を取り巻く様々な人物や社会的な事象を取り上げることにより、多面的に時代の流れを浮き彫りにすることをもくろんでいる。

本稿では金沢美大工業デザイン専攻の出身である一青年が経営するある工場を取り上げた。彼の家の先祖は富山県高岡の出身であるが、明治以来代々金属工芸を生業としてきた家である。それがどのようにして鉄工所に変わり、さらにはデザイン主導型を目指す企業へと変身を遂げて行ったのか、聞き取りによって明らかにした。さらにはこれに関連して明治に始まる近代デザイン教育を振り返り、今日における工芸やデザインの教育の意味を再考してみることを企図した。

以下先ず明治以来のデザイン教育の流れを概観してみたい。これについては前報において、水野家九～十一代の説明で若干触れているので重複する部分もあるが、ここでは平成4年現在までの流れを付け加え、教育だけをまとめて1章とした。今後の当該教育に対し何らかの手掛かりが得られるならば幸いである。

■ 1 デザイン教育の流れ

1) デザイン教育発祥の地

金沢は京都と並んで美術・工芸の盛んな土地であった。今日の京都芸術大学美術学部の魁である京都府画学校が設立されたのは明治13年（1880）と早い。九代源六は八代の援

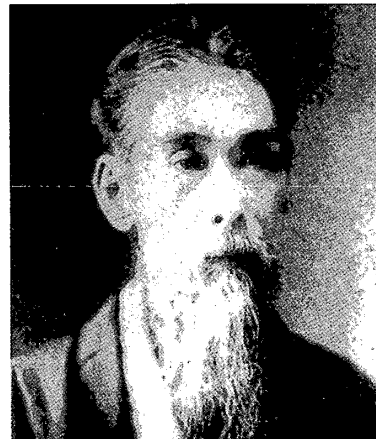


写真1 納富介次郎

助によっていち早くこの画学校に遊学したことは前報でのべたとおりである。

しかし、金沢でも美術学校を造ろうとの動きはこの頃から既にあった。すなわち、明治政府から派遣されて九谷焼などの指導に当たっていた納富介次郎が金沢区方の工業学校を設立するのは明治20年のことだが、この背景には熱心な地元の美術学校設立運動が以前からあったことが知られている。⁽¹⁾ 創立者納富の強い意志によって、同校は美術学校ではなく結局工業学校としての道を歩み、今日の県立工業高校となっていることは周知のとおりだが、この納富が作った工業学校は当時のカリキュラムや校則によって、明らかに今日いうところの工業デザインを目指していたことは疑いなく、この意味で金沢は日本における工業デザイン教育発祥の地と見なされるのである⁽²⁾。

2) 金沢美術工芸大学

金沢美大は第二次大戦の敗戦直後、昭和21年11月に開校された金沢美術工芸専門学校を

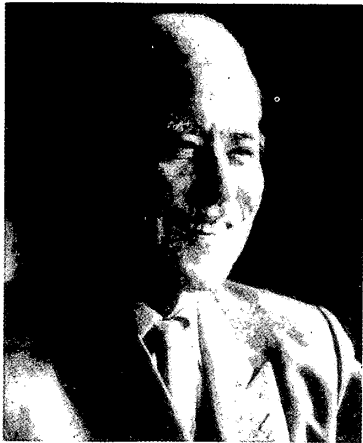


写真2 森田亀之助

濫觴とする金沢市立の美術学校である。令名芳しい今日このごろでは、戦前からの長い歴史を有しているかに見られたり、時に国立と勘違いされたりもしているが、れっきとした市立の大学であり、それも戦後、日本中が食うや食わずで困窮していた時代に、熱心な市民の運動によって設立されたというところこの学校の真面目がある。

先に述べた地元金沢の美術学校を持ちたいとの思いが明治から連綿と続き、金沢美大の開設へと連なっていると見ることができる。

さてこうした背景のもと、当初の学科目は日本画、洋画、彫刻の三専攻を擁する美術科を筆頭に、陶磁科、漆工科、金工科が設置された。これが26年には短期大学に格上となるが、工芸三科は美術科三専攻に歩調を合わせ、各々専攻として組み込まれ工芸科を形成している。

3) 産業美術学科の誕生

しかし四年制大学に昇格する昭和30年からは西洋事情に明るい森田亀之助⁽³⁾学長の強い意向もあって工芸科は廃止され、産業美術学科が発足することとなる。当時工芸の各専攻は定員割れを起こすほど人気なくなっていたようだが、当時日本の産業界は戦後復興を成し遂げて家庭電化が本格化した頃であり、グッドデザイン運動が日の出の勢いで台頭していた時代であった。

その産業美術学科の中身は商業美術(グラ

フィックデザイン)と工業意匠(インダストリアルデザイン)であった。主任教授にはそれぞれ大智弘、柳宗理という東京美術学校出身の当時第一線で活躍中のデザイナーが起用された。内外の美術工芸事情に通じた森田学長ならではの人事であった。⁽⁴⁾

工芸の各工房はこれにともないデザインのワークショップとして位置付けられたのである。

ところが異質なものに対する強い拒否反応を持つ金沢の体質そのままに、金沢美大はアレルギー症状に見舞われる。理論的にはデザイン系学科の重要な柱として将来的には建築(あるいはスペース)デザインが置かれるはずだったものが、10年後の昭和40年からは再び工芸が、商業デザイン工業デザインと改称したデザイン二専攻と並んで「工芸・繊維デザイン専攻」と看板を改めて再登場するのである。

名称から推測すると、地元の繊維産業に資するとの大義名分のもとに復活したのであろうか、当初、工芸と繊維の間に(・)はなかった。筆者が着任した昭和43年以降に、これでは繊維だけの学科と間違えて入ってくる者が多いから、はっきりさせるために(・)を入れたい、と同専攻の板坂辰治教授(故人)から提起され、産業美術学科の学科会議で了承されたいきさつがある。当時女子の受験生が非常に多かったことも、理由に上げられていた。(結果的に女子は減らなかったが)

ともあれ再び橋頭堡を得た工芸はついに昭和49年には繊維を取り去って工芸デザイン専攻と改称するに至るのである。そして最近では産業美術学科からも離脱しデザインの呼称も取り去って工芸科として近々改組されることが決まっている。(これにともない、デザイン系二専攻はデザイン科⁽⁵⁾として再編される)地元の工芸美術に対する肩入れぶりはこうした一連の流れからも推し測ることができよう。「近代産業との直結」⁽⁶⁾を謳い文句に出発した産業美術学科ではあったが、このよ

うな曲折を経ずにはいられなかったのである。なお、筆者が着任した昭和43年の頃は未だ建築専門の研究室があり、由良滋助教授（当時、後九州芸術工科大学教授）担当であった⁷⁾。

4) 工業デザイン台頭の背景

さて、筆者が専攻するのはこの工芸ではなく工業デザインである訳だが、ここで工業デザインとは何かを若干解説しておきたい。

20世紀は優れて工業化の世紀であったが、工業デザインはこれを支える必需のものとして登場し、周知のように瞬く間に世紀の寵児となったものである。しかし日本の場合はヨーロッパに比べその発生事情がかなり異なっている。つまり近代デザイン発祥地のイギリスでは、産業革命の進展による機械生産がもたらした非人間的な状況に対するアンチテーゼとしての意味が強かったのに対し、日本の場合、国家的な要請としてひたすら輸出を促進するために自前の優れたデザインを持つ必要性に迫られていたことである。

この点は明治はもちろんだが、第二次大戦後もそれほど事情は変わらない。例えば昭和32年9月ロンドン空港において、時の外務大臣藤山愛一郎が、日本人によるデザインの盗用問題で外国人記者団から質問を浴びたことがきっかけとなって、官民挙げてデザインの保護育成策に乗り出すことになったいきさつなどが典型例である。

その結果が昭和33年4月通産省に設置されたデザイン課であり、同年秋からのグッドデザイン商品（Gマーク）の選定開始であるといえる。金沢美大の産業美術学科の開設も恐らくは中央での思潮の反映であったと考えられるが、明治以来の産業工芸運動に加え、大正期からの新工芸運動や民芸運動をふまえ、その上でバウハウスなどヨーロッパの最新の動きに習ったもので時期的には東京芸大の工芸計画、千葉大の工業意匠に送れることわずか四年、地方大学としては異例の先駆であった。

以上金沢におけるデザイン教育の流れを見てきたが、明治における納富の教育といい、昭和における森田の構想といい、こうしたデザイン教育の先駆性が、地元金沢で全面的に受け入れられ、産業界に有効に活かされてきたとは言いがたい。

国の施策は功罪半ばするものがあるとはいえ、教育界におけるデザイン対工芸のぎくしゃくした関係が、そのまま近代産業対伝統産業（地場産業）の疎遠な関係に引き継がれていることは周知のとおりであり、今後の課題であろう。

■ 2 飾り職から工業デザインへ

ー吉田吉光家の歩みー

吉田家には、由緒書などはないが、それは現当主の茂氏が次男であったこととともに、水野家とは異なり、もともと一介の町方職人⁸⁾であったことにもよる。

以下、吉田父子からの聞き取りによって時代の流れを考察してみたい。

ーインタビューー

黒川（以下Q） 先ず大まかな御社の歴史をお聞かせ下さい。

社長（茂氏、写真3） 父は戦時中は中島航空機の下請けの金沢航空という会社で製造現場の責任者をしていましたが、終戦とともに元の飾り職へと復帰します。



写真3 吉田茂氏



写真4 吉田茂雄氏

私の祖父は與三吉（よそきち）といひまして、明治年間に⁹高岡から移住してきた飾り職だったといひます。兄弟は6人いましたが長男だった父が後を継いで飾り職をしていたんです。作家名は吉光といひます。品モンは戦前は武蔵屋という商人に納めてましたが、いつも随分貧乏してました。

古梅園という京都の硯・筆問屋からの注文で水滴を作るようになって多少良くなりました。戦時中は軍需産業へ徽章を作って造幣局へ納めています。戦後は50銭銀貨をつぶしてキセルなどを作っていたものです。当時同業が10人くらいいましたでしょうか。しかし戦前大正から昭和一桁ぐらまでは300人くらいはいたと思います。いろいろな専門に分かれてましたが。私は飾り師は戦後2年ほどやっていたんです。当時仕事もなかったし父がやっていたもんですから。父の仕事を手伝ったこの2年の間に私は銀の製作工程を学びました。やがて私は父の次の弟が西川商店という織物会社の営業のトップ（総支配人）をしていたものですから、兄貴とともにそちらへ就職します。ところが私は勤めてみて、どうにも自分には生きていけない世界だと悟りまして、転換したのが昭和29年です。その頃兄貴と父親が既に板金業を細々とやっていた。そこへ私がまた参加したのです。設備といつても手回しのグラインダーにバイス一丁と電

気ドリルくらいで後は飾り職の加工道具でやっていたんです。

私の飾り職としての歴史はそんなもんです。

—Q— で、その後独立されて大成工業を作られたのですか。

◆社長 大成工業としたのは39年ですが、その前は名前もないような町の鉄工所でした。昭和30年に結婚しまして、それで思い切って独立したわけです。株式会社にしたのは大成工業という社名にしたときです。

—Q— シグ・ワークショップという片仮名の社名にされたのは確かこの新工場へ移られた昭和62年の1月でしたが、これは今後の御社の舵取りは息子さん（茂雄専務）に任せたとのことだったのでしょうか。

◆社長 そういうことになりましたか。近々社長も引き渡そうと思ってます。

—Q— 兄弟の方はその後どうなりましたか？

◆社長 3人兄弟で、兄は亡くなりましたが、弟も同業で、同じような仕事をしてます。吉田武國というのですが、吉武金属工業という工場を金沢の進和町でやっています。どちらかというとプレスが専門です。

—Q— お父さんはその後どうされました。

◆社長 父は岩根町でずうっと飾り職を続けてましたが、72才のときに病気になりまして86才で亡くなりました。叔父の藤吉さんが織物会社を定年退職した後、あとを継いで仕事をしてましたが数年前に交通事故で亡くなりました。先生はこういう昔のことばかり調べておられるんですか。

—Q— 昔から今までのつながりを明らかにしたいと考えています。今の人たちに何らかの参考にして戴きたいと考えるものですから。

◆社長 それはあり難いですね。

—Q— 工芸というのは、考えて見ると今日のデザインまでずうっとつながっているんですね。現代の新しいものをデザインするとき、例えば金沢らしい製品を造るということはどうということなのかを考えるときに役に立つと



写真5 指輪

思っています。工芸職人から工業へ転身した例は、何人か知ってますが、例えば福正さんをご存知ですか。鋳物屋の。

◆社長 一寸加工分野が違いと分かりませんね。象眼師とか、サハリのドラ作りとか、いろいろ父から聞きましたけど、やはりちょっと分野が違いと…ドラ作り名人の魚住為薬（人間国宝）らとも父は親交があったんですが、『あいつァ、ラップ吹きや』とかいってましたがねえ。でも名人は名人ですからねえ。（指輪を見ながら）例えばこの指輪なんかは、彫刻になると父は出来んから外へ出すんです。これは筆メッキです。金の台に銀メッキです。この指輪は家の（妻）が形見に貰ったんです。嫁さん3人居るのが1人に1つずつ貰ったんです。こちらのかまぼこがたは何の変哲もないもんです。（写真5）

これは鉄の固まりに彫り師が裏紋（雌型）を彫る訳です。そこへ金の棒を、大体の長さにして当てこちらから叩く訳です。そうするとその模様がこちらへ写っておる訳です。鋼に彫り込む彫り師が居ってね、たしか寺町に居たが今はどうなったか、そういう彫り師がいて作業分担する訳です。型を作って貰うといちいち1つずつ彫らなくても幾つでも同じものができる訳です。

—Q ある程度量産が考えられて居た訳ですね。



写真6 こぼし

◆専務（茂男氏） 常温で叩くのかな。

◆社長 純金だから柔らかい訳です。これらの非鉄金属は叩けば叩くほど固く締まる訳です。そして焼くとまたもとに戻る。1つだけ必要なときは彫り師に出すが、たくさん作るんだったらそういう型を用意していた。作業分担をやってましたね。

—Q これは何ですか。

◆社長 これはお茶のこぼしです。デザインはずんどうとかいろいろありますが、山田屋はこれがよいと言って、このところ（高台から縁に掛けてのライン）をものすごく気にしてるんですね。この線がどうのこうのと、お茶の席では問題にするそうで、わたしらこんな線がそんなに意味があるのかと思いましたが、気にしてましたね。（写真6）

—Q デザインは誰が決めて居たんですか。

◆社長 職商人が好みを職人に言う訳ですね。

だからわたしら職人は悲しいなと思ったのは、高橋さんがネ元美術館館長の、家の親父にキセル作ってくれと言うて来るんです。こんなの作れ、と言う訳です。職人は作るだけです。作家はそれを自分の作として出す訳ですけども、職人は作ることにしか知らないから一生懸命作家の言うとおりに気に入った形に作ろうとする訳です。私は高橋さんが作ってくれと言った煙管を父が最高によいものを作ったのを知ってます。

—Q 昔水野源六氏の爆弾発言がありました⁽¹⁰⁾。

◆社長 おっしゃるとおりですよ。父も下請けしてますから、こういう気持ち持ってますよ。でもデザイナーはいいことも言いますね。煙草をいれる所なんかきれいに朝顔型に開いてね、胴のところから絞っていくところとか、こんなふうに作ってくれとって、職人はそういう姿を可能にする技術を持っていて、やはりそういう形に持っていく訳です。だけど心の中では『あいつの代作だ』と思っている訳です。

—Q 専務はそういうことを知ってますか？

◆専務 記憶がないですね。

◆社長 専務は運がよいと思う。私は父に対し、兄の所でなく家へ来て（仕事を）やってくれと何度も言った。こういっては何ですが兄貴よりは私のほうが仕事の面では上だったんです。いろんな面で、工場の規模とかいろんな面で、だから家で面倒見てくれと言ったんです。でも親父は『そんな訳にはいかん、兄貴に済まんから』とって来なかった。でも兄貴の所へもまた行ってないんです。吉武（三男の工場）へ行ってらんです。そこで作業場こしらえて、やってらんです。私はやはり父親が欲しかったですよ。居るだけで違います。専務は運がよい。親がいるとないではやはり違いますよ。

—Q それで息子さんを美大へ入学させた。

◆社長 私は心の狭い人間でしてね、大学へやるに当たっては、金のかかる大学はだめだぞといいまして、心の中では恨んでいたと思いますよ。本人は悩みながら、彼はかれなりに一生懸命、塾へ通ったりいろんな苦勞しながらやったと思う。

—Q だれか美大の先輩に知人がいた？

◆専務 いいえ。デザインなんて高校生は知らないですよ。特に工業デザインといわれてもね、グラフィックはまあ分かるが、後ファッションですかね、ましてID（インダスト

リアルデザイン）なんて言われてもピンと来なかった。

先生に言われたのは立体だということ、グラフィックは平面だと、僕はものを造るのは大好きで家でもモノ作りやってみましたし、家の手伝いやってましたから、ものを作るなら行こうかと、デザインうんぬんという感覚ではないんですよ。

それに僕はバンドやってましたから仲間が地元に残ってましたし、二水高校でしたから本来は金大へ行けるのですが、落ちこぼれでしたから行く所がない。三年になってからアトリエ圭（塾）に行っておッサンを習った。余り動機は純粹じゃないんです。

おじいちゃんが飾り職だったからとか、そんな由緒正しいんじゃないですよ。恥ずかしいけれど。

美大へ入ったのはそういう経緯です。確かにものを造るのは好きでした。そういうのは興味ありましたから。でも初めはグラフィックへ行こうと思ったんです。わかんなかったから。IDと言うのが何か。でも今はIDやって本当によかったなあと思っています。

—Q 途中から気が付かれた訳ですね、ご自分の目標にぴったりだと。

ところで御社は貴方の学生時代の頃は電気の配線ボックスのようなものしか作っていませんでしたか？

◆専務 今も売上の的には同じですよ。いわゆる配線ボックスが主流ですが、最近では品質です。最終的な仕上の美しさというのか。デザインしてるのかといわれると、ただの箱なので、デザインはしてない訳です。そこで、デザイナーの川崎さん⁽¹¹⁾の車椅子の開発に協力するなど、新規の事業を興しまして、今年でちょうど3年目になります。現在はまだ採算ベースには乗っていませんが、少しずつ花を開き始めているところです。

◆社長 私は目から鱗が落ちたと申しますか（息子が）『人生はデザインだ』と言ったんで

す。デザインというものがものだけじゃないんだと『人生そのものがトータルなデザインだ』と私はハッと思ったんです。考えて見ると、私は何と下手なデザインを人生に対してしてきたことかと思った訳です。そういうことを聞いてからちょっと考え方が変わりました。やはり家を建てるにしてもいろんなことを考えねばならん、それがまた最終的にはトータルに仕事の面にも成果となつてはねかえって来る訳です。最近そういうふうになりました。

—Q 君は幸せだね、私も父の生きて居る間に父からそういう言葉が聞きたかった。

◆**専務** やはりデザインというのは何にでも応用のきく、本当に素晴らしいものだと思いますね。川崎さんとの出会いというものもありますが。

ところで昔はデザイナーという職種はなかったのでしょうか？

—Q 親方がそれに当たるのでしょうか。絵細工（絵師）は居たのですが、その絵をどの様に製品にアレンジするかは親方が決めて居たようですから。工房の親方は大勢の弟子を抱えて、それはそれで大変苦勞しています。特に武士の仕事がなくなった明治以降は。水野

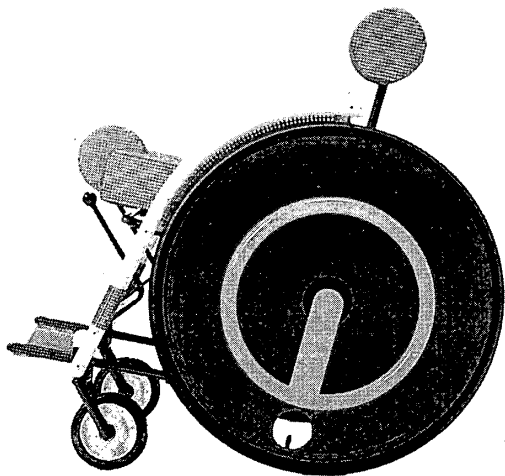


写真7 車イス/デザイン 川崎和男

源六家でも随分貧乏したことが残された手紙などで分かります⁽¹²⁾。

◆**社長** 父親の話を聞いて居ると、いつも生活苦とお金の入ってこない話ばかりでした。子供心にいつも耳に入ってくるんですね。そして借家で家賃を払うのに四苦八苦してるでしょ。私は所帯持ったら絶対に家を買わんならんと考えたですよ。

小さいときから聞いてきたものですから、子供心に情けないなあと思ったですよ。家を建てたのは入江で所帯を持って2年目でした。今の場所ではなく100メートルほどの間を3回変わって居ます。45万で30坪の家が建て売りで出たのを、お金をかき集めて手に入れ、その後二転三転して現在の場所へ落ち着いたのです。（ここで写真撮影）

—Q こうしたもののデザインは元々あるものですか、それとも商人が…。(写真6)

◆**社長** 茶道具屋がワビ・サビを心得ていて、その言うとおりに職人が作る訳です。道具屋がお茶の道へ入らないかというんです。茶の道へ入ってはじめてわびさびが分かってくると、そして作品が生きてくると、こういつてました。

—Q このこぼしは打ち出しですね。

◆**社長** そうです。コツコツと30回くらいもなましを繰り返して打ち出して居るんです。でも、今のスピード時代にこんなことしてたらとても採算は取れません。今は車ですとか現代生活に必要なものにデザインが生かされる時代です。私は鉄の打ち出しに興味があるのですが、あれももう金沢では無くなってしまったでしょう？

—Q はい、大聖寺の山田宗美という方が有名でしたが、今はもう弟子の方もなくなって絶えてしまったようです。米沢弘安さん⁽¹³⁾はこの宗美に習って少しは出来たようですが。

◆**社長** 私はこれくらいの純銀などの柔らかいものを打ち出す技術は覚えたんです。真鍮になりますと固くてね。それに今はもうヘラ絞

りの時代でしょう、もうあんな面倒なことはやられてませんよ。

—Q しかし今でも槌目の鍋やヤカン人気があると思うが、…

◆**社長** あれはへら絞りの後で槌目を装飾的に着けているんだと思いますよ。気の遠くなるような工程ですからね。今のスピードの時代にこんなことしていたらとても採算は取れないですよ。今は先ず飾る床の間がなくなったでしょう。それに車の時代でしょう。同じ金を出すなら車を買うという時代ですから、こんな気の遠くなるような仕事をしていたら食っていきませんよ。悠長なことやられてないわけです。

—Q イタリアのカスタムカーには今も馬車時代の技術が生かされているが、日本では伝統技術は余り生かされていないですね。

◆**専務** (イタリア、アレッシの製品が載っている雑誌を見せながら) これは昔の職人の技術を受け継いだ仕事ですが、僕はこういうふうな会社にしていきたいと考えているんです。

僕の審美眼というのはひいじいちゃんのそれを受け継いでいると思うんですが、その頃の品物が皆骨董品になってしまっているのはおかしいですよ。やはり技術が脈々と続いて現代に生かされているということが伝統の本当の意味だと思う。

—Q その意味では伝統技術と近代工業はスパッと切れてしまっている。

◆**専務** 伝統工芸が博物館のようなところでしか見られないのはおかしい。偏ってしまっています。

—Q 現代生活と関係のないものが多い。

◆**専務** もうからんから、職人さんは苦勞しても(経済的に)潤わなかったら意味がないので、昔300人もいたものが10人になってしまったというのは無理もないですよ。

—Q 手間がかかったから高くするというのではしょうがない、時代に取り残される。

◆**社長** 香炉の銀のホヤは、このくらいの大^{じゅうかく}きさで蛇籠の形に刻んだものですが、金型に銀の板を当ててハンマーで叩いていました。母が手で抑え、父が手で叩いて、2人でやりました。そして蛇籠のへこみを作ってから、透かしの部分は1ケずつプレスで抜いてました。後やすり仕上げをしてそれから後、今度はおわん型にするわけです、香炉ですから。で今度は有名な人の作った香炉本体にホヤを掛けるわけです。

蛇籠の場合は随分売れました。

父は随分進歩的な考えを持ってましてね、それまでは一コマ一コマ全部糸鋸で抜いていたんですが、それをプレスでやるようにした。端のほうは六角が小さくなるし三角なども出るので、いろんな型をこしらえてやりましたね。抜くのはそのパンチ型とダイ型を2種ほど用意してエキセンプレスで抜いていく訳です。穴は500個ほども開けるのでしょうか。



写真8 アレッシのヤカン

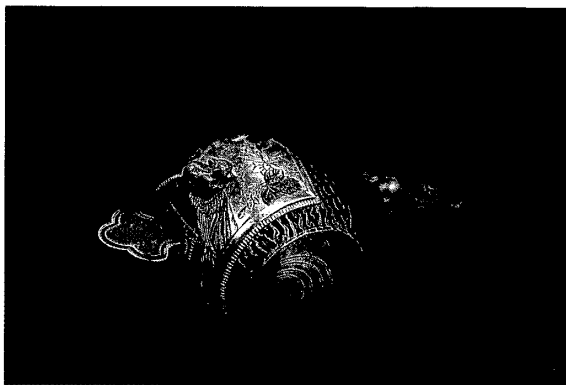


写真9 打出の小槌／作 吉光

最終的に銀にいぶしを掛けて仕上げます。それを武蔵が辻の武蔵屋で売ってました。戦前はそこで戦後は近江町の山田屋です。お茶屋で茶道具も扱っているんです。今もあります。料金は8000円ほど貰って高いかなあと心配しながら店へ見に行くと、何と5万円で売っている訳です。職人根性というのは8000円で高いか8500円貰いたいかと悩んでいるわけです。

◆社長 (打ち出の小槌の作品を見ながら) このようなメッキ物もやりました。金をとがして筆で塗る筆メッキなんかもやりましたが、(父は) 本を買ってきて勉強してましたよ。飾り屋というのは金を溶かしたり、筆メッキをしたりとなかなか科学的な知識があるなあと思ったですよ。これは片截り彫りです。彫りは彫り屋へ出していました。(写真9)

—Q これは達者な彫りですね、タガネに勢いがある。やはり専門の職人さんというのはすごいね。迷いが無い。

◆専務 間違っても直せない訳ですからね。

◆社長 何度も繰り返すようですが、職人というのは本当に悲哀の生活ですね…。

加賀の殿様というのは象眼などの金工に力を入れていて、殿様お抱えの飾り職もいたそうですが、弟子入りすると何年間も炭研ぎなどの下仕事しかさせてもらえない、というようなことも聞きましたし、土農工商と一番下になっているけどやはり商いは強いですね。

—Q またいつか作家として飾り職の仕事をしてみたいと思われませんか。

◆社長 これで食べて行けるモンならね、私はやりたい気持ちはあります。その時は吉光を名乗ることになると思いますが、でも貧乏は懲りてますから…。やはり商人のほうがつよいですね。

◆黒川 お忙しいところどうもありがとうございました。

■感・知性的ものづくり

—まとめに代えて—

かつて大方の工芸職人は、親方や依頼主から命じられるままに形を作りあげる下職人として悲哀の生活であったことは、現社長の茂氏が再三語っているが、このことは田中喜男氏の諸著書にも詳しい。⁽¹⁴⁾ 問題はその人たちが、戦後近代工業に代わってはたして真に解放されたのかどうかということであろう。体裁こそ近代的な設備になってはいても、多くの町工場は大企業からの下請けや孫請けといった仕事が大半であることは周知のとおりである。これは見方によっては、ただ親方が親企業に代わったというに過ぎまい。

かつて工芸職人から脱して作家になって行った人達が求めたのは、みずからの感性によって自らが作りたいたいものを作るという魅力からであったろう。働くことの楽しさというのはこうしたことから生れるものであり、近代デザイン運動の本質も実はこのへんにあったはずである。日本の場合は主に殖産興業・富国強兵の一環としてデザイン教育が取り上げられたので、人間の心の発露というよりは、国家の体面やあるいは輸出適性だけが問題にされた訳で、健全な意味のデザインとは言えず不幸なことであった。⁽¹⁵⁾

専務の代になってはじめて、自分の会社はこういうものでありたいとのイメージを語っているのはその意味で大きな前進である。この工場にしては立派すぎる社名のロゴタイプは専務が尊敬するデザイナー川崎和男氏からプレゼントされたものだが、そこには今この会社が目指そうとしているものが表現されている。すなわち、シグは Sense (感性) Intelligence (知性) Grid (ネットワーク) の三つの英語の頭文字を集めたものであるが次期社長たる専務の願い『感・知性的なものづくりを人的なネットワークを生かして行なうこと』がそこに込められているからだ。⁽¹⁶⁾

こうしてモノづくりや経営に対する哲学が

明確になってくると、工場は何もモノを造ることだけにこだわらなくても良くなっていく。いわんや鉄工所にこだわる必要はなくなると専務は考える。同じ精神で作られるならば金属以外の材質であっても、さらには他から買入れたもので製品構成しても構わないわけだ。事実、現在同社が扱っている川崎氏の作品などは同社で製造する箇所はほんの一部にすぎない。いみじくも『商は強い』と半ば羨望を込めて現社長が語った商業の才能を、現代っ子である専務はいつの間にか身に着けている。それは近代的なデザイン教育を受けた者の強みであろうが、いわばデザインマネージメントの才である。

言葉を換えて言うならば、伝統的な手仕事の良さを精神的に残しつつ、商と工をデザインを媒介にしてドッキングする、ということになろうか。伝統の手仕事盛んであった土地柄を背景としつつ、このような柔らかなデザイン概念の導入が『金沢デザイン』には今求められているといえるだろう。

注記

- (1) 石川県立工業高等学校 県工百年史 7p 昭和62年
- (2) 京都府画学校に図案科ができるのは明治29年で遅い。
- (3) もと東京美術学校教授 美学・美術史学者。昭和39年に退職するまで17年余金沢美大学長職を勤めた。
- (4) 本学名誉教授松村数雄氏によれば、米田重博氏（同名誉教授・故人）の人脈も大いに力があったと言う。

- (5) 仮称。
- (6) 金沢美術工芸大学 同窓会40年史 64p。
- (7) 同氏は現在沖縄芸術大学の教授であるが、最近来沢された際直接伺った話では、同氏が着任するに当たっては（昭和41年4月）将来建築専攻を作るとの口約束があったと言う。
- (8) 昭和の初め頃に行われた金沢市金属工芸同業組合の選挙で高岡から移住してきた初代が貴金属工芸部の代議員に選出されているところを見ると、町方とはいえ人望の備わった名工であったようだ。
- (9) ただし戸籍では大正8年先代の死去による家督相続届け出の10日後に金沢への転籍届けが出されている。
- (10) 黒川威人編「ホワットイズ・金沢」44～46p 平成4年。
- (11) 昭和47年金沢美大工業デザイン専攻卒、現在イーエクスデザイン代表取締役。平成3年毎日産業デザイン賞受賞。福井市在住。
- (12) 田中喜男著「伝統工芸 職人の世界」52～56p 平成4年。
- (13) 昭和47年4月、文化庁から加賀象嵌の記録作成の措置を講ずべき無形文化財（選択書）を受けたが、同年10月84歳で没。
- (14) 前掲「伝統工芸 職人の世界」中には多数の指摘がなされている。
- (15) 出原栄一著「日本のデザイン運動」82～3p「当時のヨーロッパにおけるモリスらの工芸運動が、いわゆる社会運動ときわめて近い関係にあり、近代工業社会のなかの矛盾をついた反体制運動であったのに対して、我が国の運動は、むしろ楽天的ともいえる体制順応型の運動であった。」（1989年）との指摘が鋭い。

（平成4年10月17日受理）